

■論 文

保育園・幼稚園における子育て相談と親のニーズとのズレ ——全国調査（保育・子育て3万人調査）の経年比較より——

望月 彰

工藤 英美（愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程在籍）

山本 理絵

The mismatch between child rearing counseling at Day care center &
Kindergarten and Needs of parents

Akira MOCHIZUKI

Hidemi KUDO

Rie YAMAMOTO

キーワード：子育て相談，育児アドバイス，保育者，親のニーズ，ズレ

child rearing counseling, advice on child rearing, nursery teacher, needs of parents,
mismatch

I. 研究の目的

現代日本において、子育てに困難を抱える親が増加しており、専門機関である保育所・幼稚園による子育て支援が期待されている。しかし実際には、親のニーズに対応した有効な支援を行うために多くの課題があることが明らかにされている。特に注目される調査研究として、科学研究費助成研究「男女共同参画社会を支える地域子育てネットワークに関する学際的基盤」（村山祐一代表 2002～2006年）がある。そこでは、どうしたら安心して子育てできる社会になるのか、どうしたら保育園や幼稚園は地域の子育てネットワークの要としての役割を担い得るのか、国や自治体の子育て支援策と親や保育者が求める支援策とはズレているのではないかなどの問題意識のもとに、全国から抽出された保育園・幼稚園を利用している父親と母親（マッチング調査）、および保育者・施

設長を対象に「保育・子育てに関する全国調査（通称：保育・子育て3万人調査）」が2003年度末に実施され、保育・子育ての状況が明らかにされた。その5年後、家庭の経済状態における「格差」が広がる中、現代の子育ての状況や親の意識、保育の実態や課題などを明らかにするため、「保育・子育てに関する第二次全国調査」が2008年度末に実施された¹⁾。

本論文では、保育者による子育て相談について、2003年と2008年に実施された調査結果の経年変化を4つの視点から検討する。4つの視点とは、①母親の要望の経年比較、②保育園児・幼稚園児の母親における要望の比較、③母親と父親との要望の比較、④保育者の意識である。これらを検討することで、保育者による子育て相談の実態を明らかにし、その問題点や改善策を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

II. 研究方法

母親調査と父親調査のうち、育児の共同化に関する質問項目の回答について、2003年調査結果と2008年調査結果を比較する。

・第一次全国調査（2003年度）

人口10万人以上の自治体において、人口規模や園定員（保育園）、公私別（幼稚園）に偏りのないように、層化抽出法に準じた方法で全国から調査対象園をサンプリングし、保育園121カ所、幼稚園25カ所、子育て支援センター35カ所、それぞれに所属する母親・父親・保育者約3万人の回答を得た。

表1 回収数（2003年）

	保育園	幼稚園	合計
母親	8,523 60.8%	5,490 39.2%	14,013 100%
父親	6,618 57.8%	4,824 42.2%	11,442 100%
保育者	2,356 88.0%	321 12.0%	2,677 100%
合計	15,141 59.5%	10,314 40.5%	25,455 100%

・第二次全国調査（2008年11月～2009年3月）

第一次調査対象の父母の数に対して約6割となるように、第一次調査の対象園からサンプリングし、保育園・幼稚園63園の父母に調査を実施した。

表2 回収数（2008年）

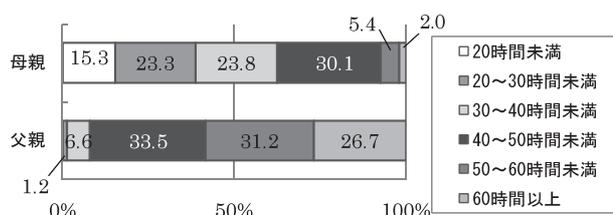
	保育園	幼稚園	合計
母親	3,055 67.7%	1,459 32.3%	4,514 100.0%
父親	2,447 65.9%	1,265 34.1%	3,712 100.0%
保育者	3,518 80.8%	835 19.2%	4,353 100%
合計	5,502 66.9%	2,724 33.1%	8,226 100.0%

表3-1 父親と母親の勤務形態（2008年）%

	母親	父親
正規社員	26.2	83.3
自営業・家族従業	6.3	11.9
合計	32.5	95.2
パート・アルバイト	30.1	1.0
派遣・契約社員	4.7	2.6
内職	1.2	0.0
合計	35.9	3.5
働いていない・専業主婦	29.7	0.6
合計	100%	100%

表3-2 保育者の勤務形態（2008年）%

	保育園	幼稚園
正規職員	62.8	81.2
非正規・週5日以上1日平均6時間以上	24.8	10.5
非正規・週5日以上・1日平均6時間未満	5.1	3.4
パート職員・週1日から4日まで	4.9	3.4
非正規・パートの合計	34.8	17.2
その他	2.0	1.1
無回答	0.4	0.5
合計	100%	100%



III. 2003年と2008年の経年変化

1. 母親と父親との子どもを通わせている園に対する改善希望の比較

園に対する父母の改善要望の中で、子育て相談に関する要望は2003年と2008年でどのように変化をしたかを見る。

(1) 母親の園への改善希望 (図2)

2003年、2008年と、園に対する母親の改善希望の上位に、子育て相談に関する項目である「ス. 親と保育者が落ち着いて話せる時間とスペース」(32.9%；2003年より7.1ポイント減)が挙がっていた。また、この項目は、現状の満足度が改善希望の項目の中で最も低いままで

あった(2008年では57.8%)。このことから、母親は保育者と話をする機会を求めており、この傾向は5年間でほとんど変化がみられなかったことを示している。

また、その他の子育て相談に関する項目の改善要望は、「コ. 子どものことや悩み事などの相談への対応」が20.1%(2003年より1.6ポイント減)、「サ. 親の要望や

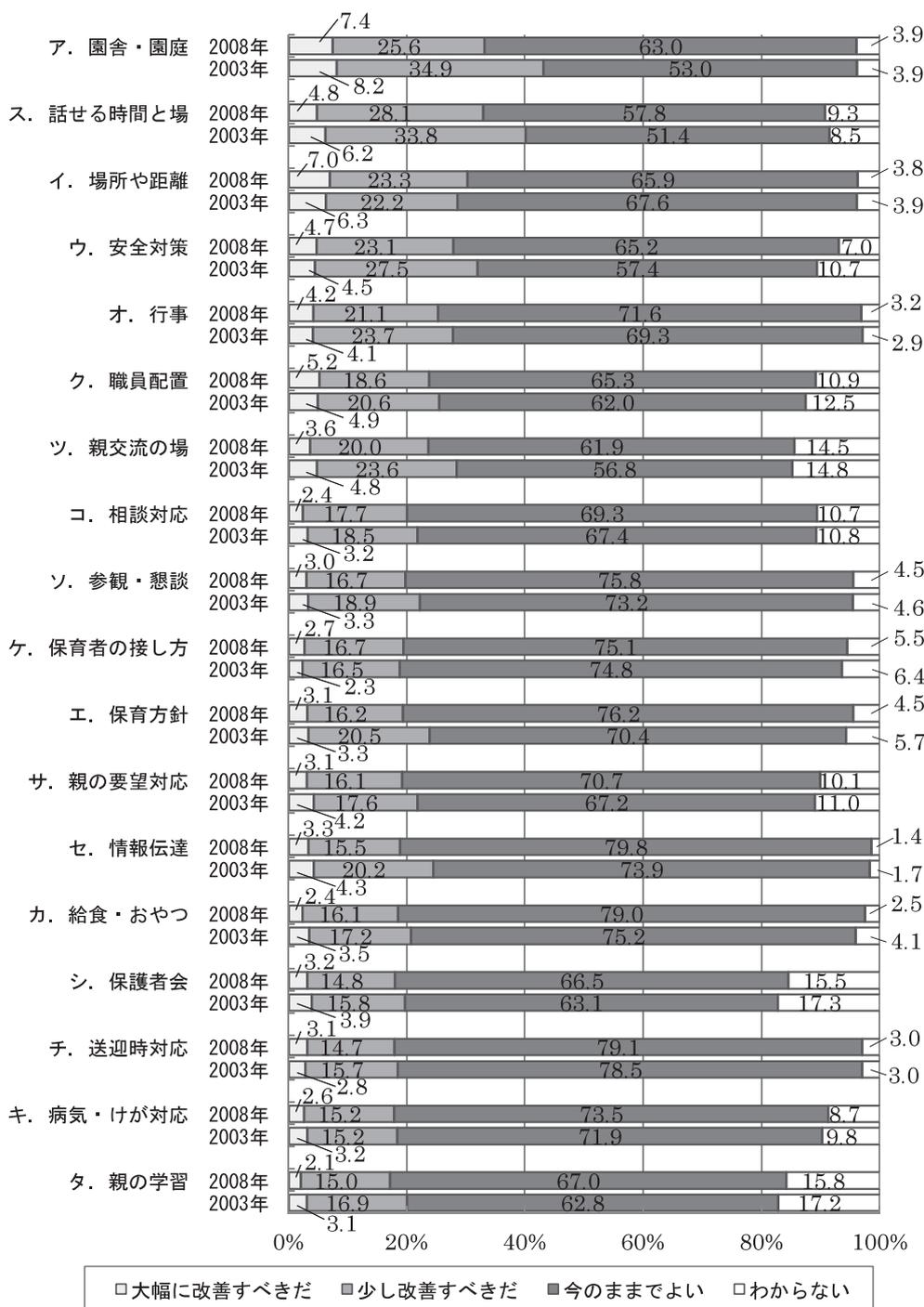


図2 母親の園に対する改善希望

意見への親身な対応」が19.2%（2003年より2.6ポイント減）であった。また、これらの項目に対する現状の満足度は約7割であった。このことから、母親は保育者の相談対応にはある程度満足しているが、相談の機会を望

んでいることを示している。

(2) 父親の園への改善希望（図3）

母親と比較して、父親の改善希望の割合は全体的に低

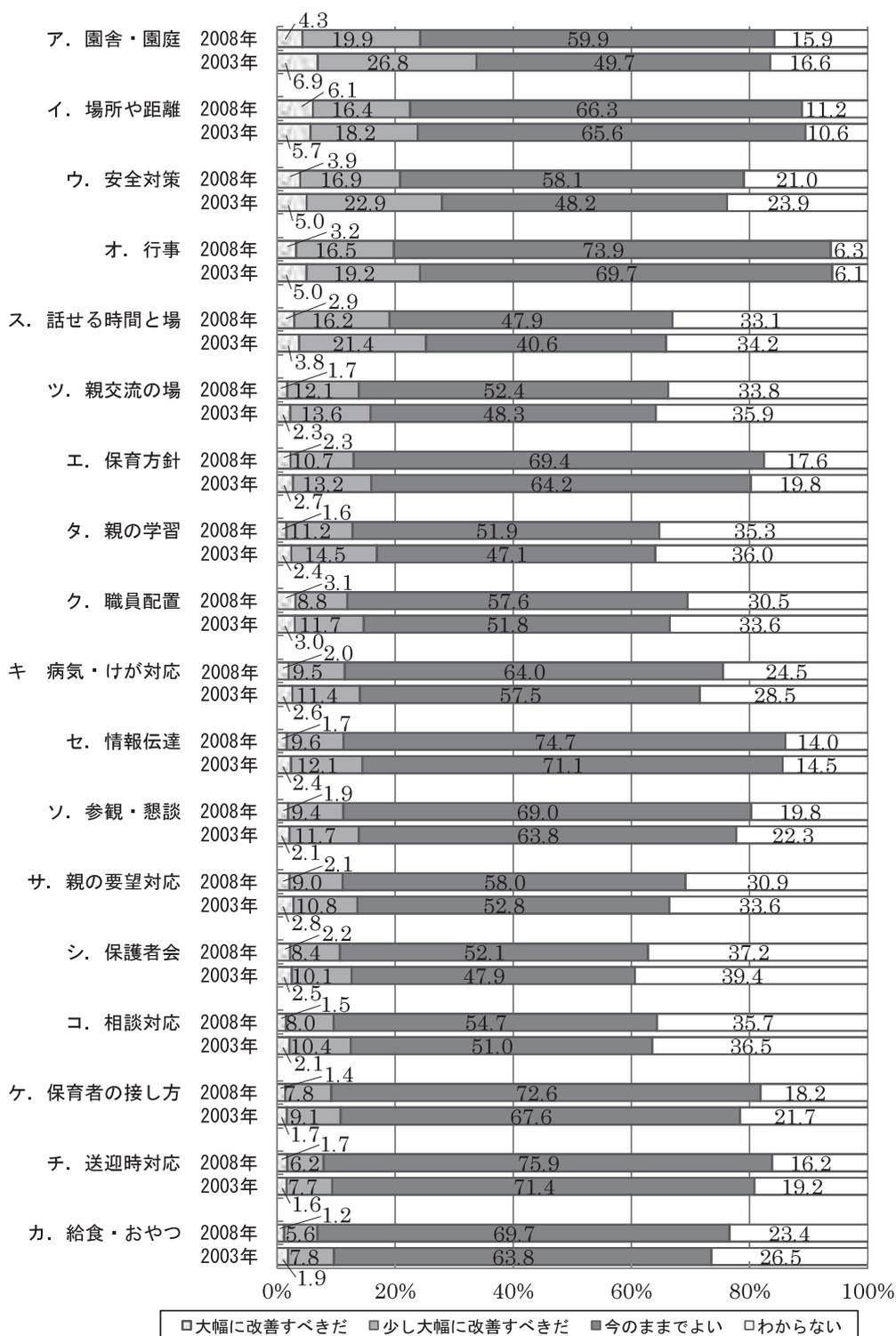


図3 父親の園に対する改善希望

く、約3割の父親が3分の1の質問項目に対して「わからない」と回答していた。また、父親が「わからない」と回答した項目の多くは、親同士の関わりに関する事、保護者会などの関わりに関する事、保育者との関わりに関する事であった。

子育て相談に関する項目については、「ス. 親と保育者が落ち着いて話せる時間とスペース」が19.1%（2003年より6.1ポイント減）、「コ. 子どものことや悩み事などの相談への対応」が9.5%（2003年より3.0ポイント減）、「サ. 親の要望や意見への親身な対応」が11.1%（2003年より2.5ポイント減）であった。しかし、これらの項目に対して「今のままでよい」と思っている父親は5割前後、さらに3割以上の父親が「わからない」と回答していた。

以上のことから、父親は母親より子育て相談について関心が低いといえる。母親は保育者と話をする機会を望んでいるのに対し、父親はあまり望んでいなかった。このことは、父親が母親ほど子育ての悩みを抱えていないか、あるいは園との関わりが希薄なためであると思われる。その傾向は5年間で変わっていなかった。

2. 保育者による子育て相談の現状と母親の希望

母親は保育者との話し合いの機会を望んでいることが、園に対する改善要望からわかった。ここでは、保育者による子育て相談について、5年間で母親の意識にどのような変化があったかをみる。

図4から、母親の子育て相談の現状と希望について、ほとんど経年変化がみられなかった。2003年と同様に2008年でも、母親は「保育者から何らかのアドバイスがほしいと思う」割合がとても高く、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると、81.9%（2003年より0.2ポイント減）であった。また、たとえアドバイスでなくても「とにかく話を聞いてもらえればと思う」母親は56.8%（2003年より0.3ポイント増）であった。ところが、「保育者に励ましてほしい」と思う母親は47.3%（2003年より3.7ポイント増）で、「アドバイスがほしい」に比べ低かった。このことから、両時期を通じて約半数の母親が、励ましよりも子育てに対するアドバイスを望んでいることがわかった。

担任保育士以外との相談については、「主任保育士や園長など他の職員とも話したいと思う」「もっとほかの親と話し合う機会を作ってもらえればと思う」は、両時期を通じて約半数だった。

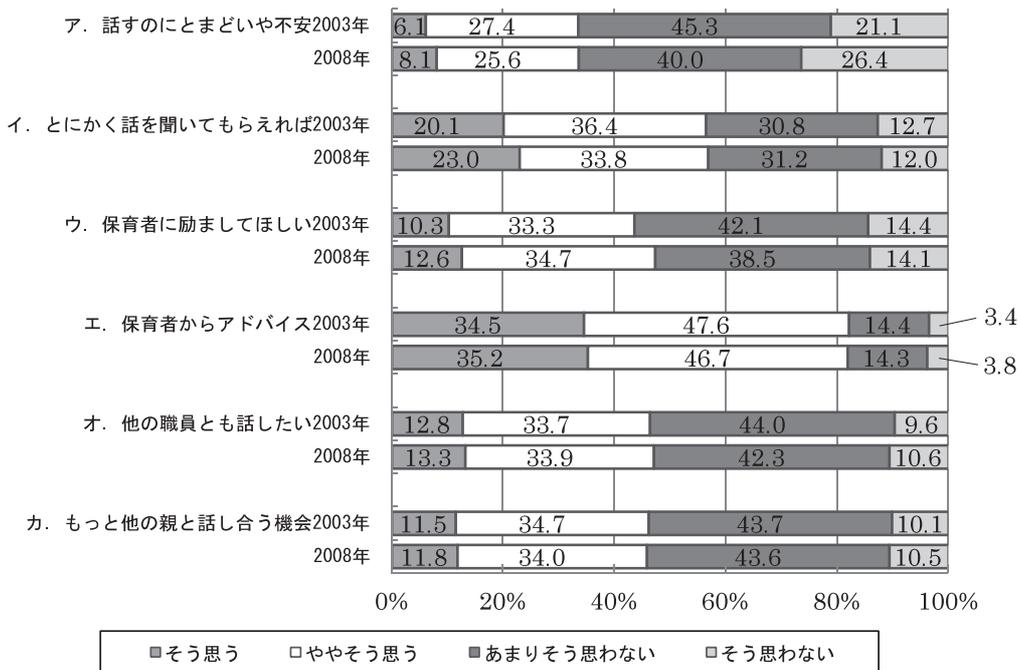


図4 母親の子育て相談に対する現状と希望

これらのことから、母親は特に育児のアドバイスを望む傾向が強く、5年経過しても変わらなかった。

しかしながら、33.7%（2003年より0.2ポイント増）の母親は「どのように話したらよいか、戸惑いや不安を感じる」と回答しており、保育者から話を聞く機会の提供が必要であると思われる。

3. 保育園児の母親と幼稚園児の母親との子育て相談に対する意識の比較

母親が保育者に育児のアドバイスを望んだり、あるいはとにかく話を聞いてほしいと望んだりしていることがわかった。では、保育園児の母親と幼稚園児の母親とでは子育て相談の現状や要望に違いがみられるか、あるいは現状や希望に経年変化がみられるかをみる(図5, 6)。

保育園児と幼稚園児の母親のいずれにおいても、子育て相談の現状や希望に違いはみられなかった。保育者からアドバイスがほしいと回答した保育園児の母親は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると82.7%（2003年より0.6ポイント減）、幼稚園児の母親では80.1%（2003年より1ポイント減）であった。また、とにかく話を聞いてもらえればと回答した保育園児の母親は56.5%（2003年より0.9ポイント減）、幼稚園児の母親では57.8%（2003年より2.7ポイント減）であった。さらに、

保育園児と幼稚園児の母親の現状や希望について、経年変化はほとんどみられなかった。

このことから、保育園、幼稚園に関係なく、子育て中の母親は、保育者によるアドバイスがほしい、あるいはとにかく保育者に話を聞いてもらいたいと望んでいることがわかった。

4. 保育者の子育て相談に対する意識

保育者による子育て相談に対する母親の現状や希望について、5年の間でほとんど変化がみられなかった。

母親の要望について、経年変化がみられなかったのには様々な要因が考えられるが、ここでは子育て相談を行う保育者の現状や意識について検討する。

子育て相談について、母親の要望が高い理由として、①保育者が子育て相談に応じる時間がない、②保育者と母親の子育て相談に対する意識の違い、③子育て世代の保育者がいない、④子育て相談を行うために必要な保育者の資質、の4点が考えられる。

ここでは、2008年の調査結果から、子育て相談を行う保育者の現状や意識について、上記の4つの視点から検討する。

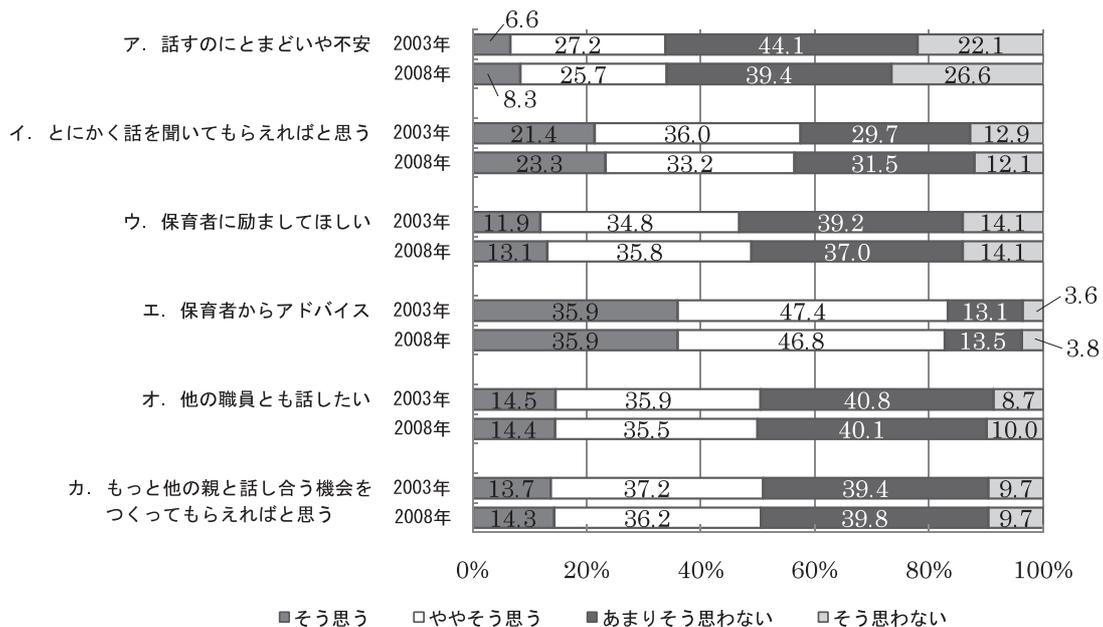


図5 母親の子育て相談に対する現状と希望（保育園）

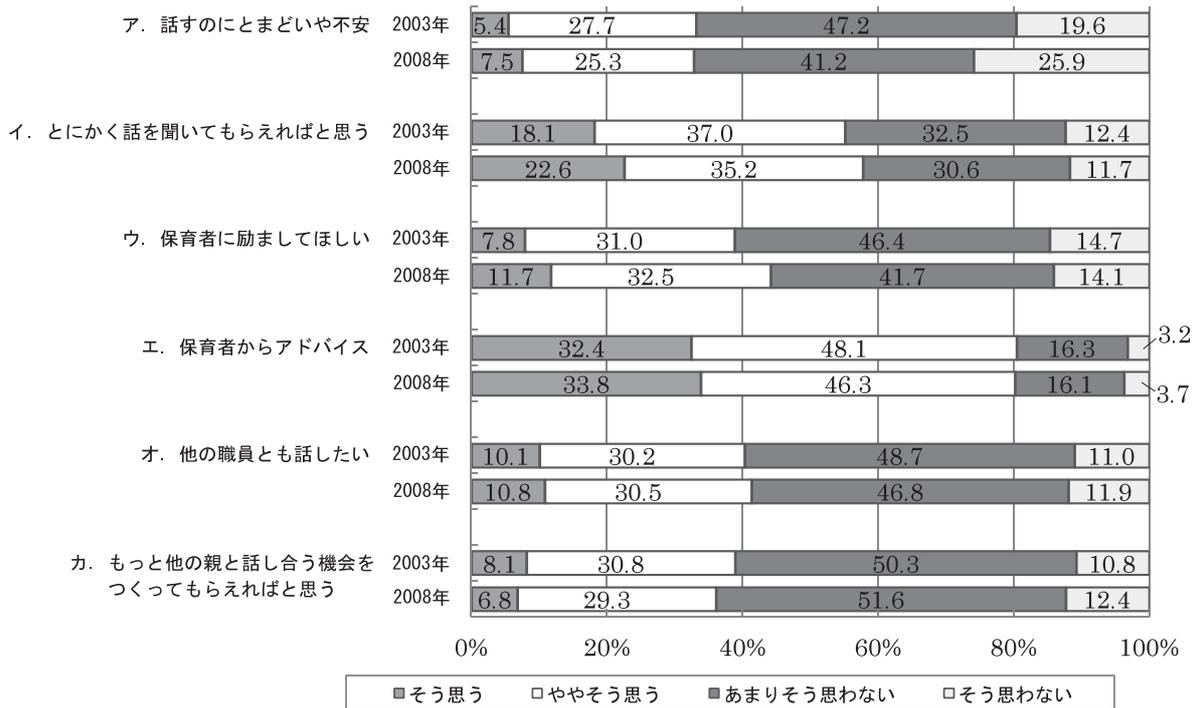


図6 母親の子育て相談に対する現状と希望（幼稚園）

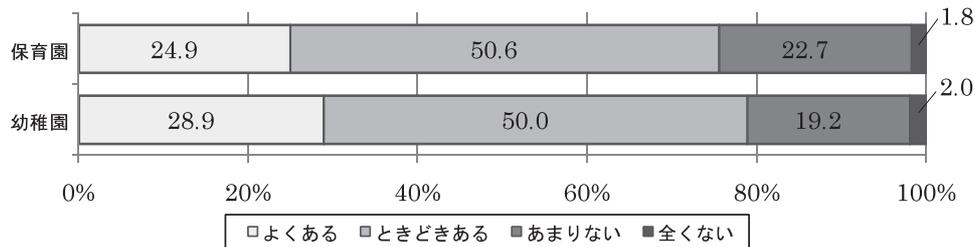


図7 日々忙しく思うような保育ができないと思うこと

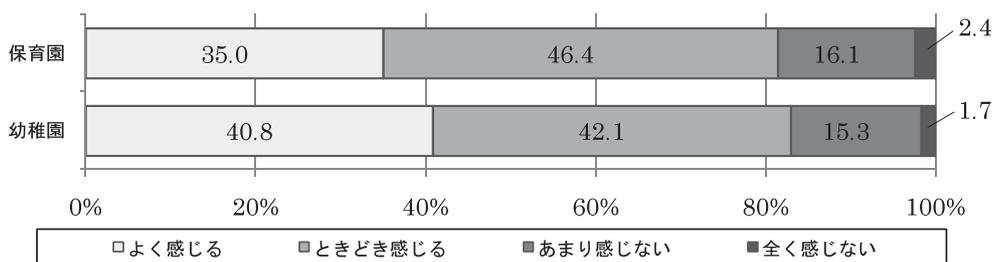


図8 保育の仕事によるゆとり不足

(1) 保育者の現状

①保育者の多忙感

2008年の調査の結果、保育者に対して保育についての感想を尋ねたところ（図7）、「日々忙しく、思うような保育ができていないと感じている」保育者は、保育園では74.9%、幼稚園では78.9%であった。

また、最近保育の仕事が忙しくゆとりがないと感じて

いる保育者は、保育園では81.4%、幼稚園では82.9%であった（図8）。そして、ゆとりをもって保育にあたりたいと思っている保育者は90%であった（図9）。

この結果から、保育者自身が日常的に忙しく、ゆとりがないと感じていることがうかがわれる。

では、なぜ保育者は日常的にゆとりがないのだろうか。保育業務が増えたためだろうか、それとも子どもへの対

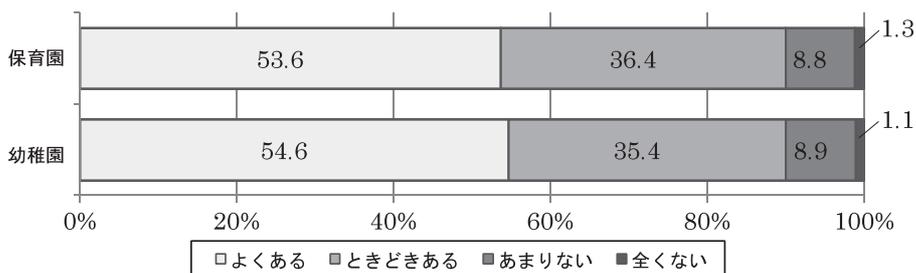


図9 ゆとりを持って保育にあたりたい

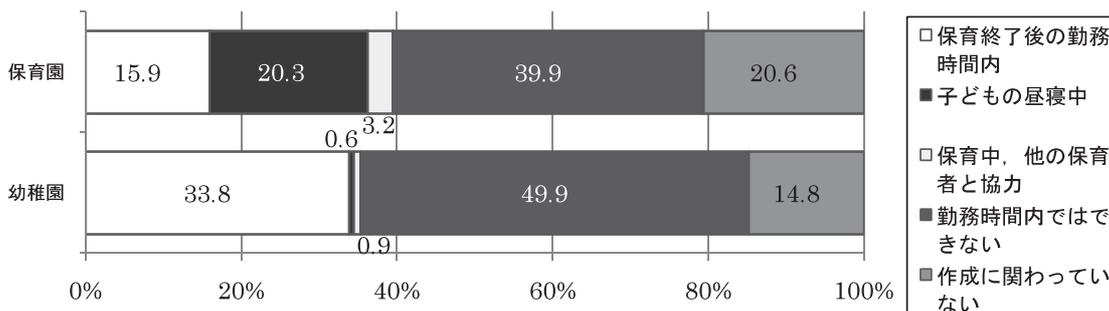


図10 日誌やクラスだより等の書類を作成する時間

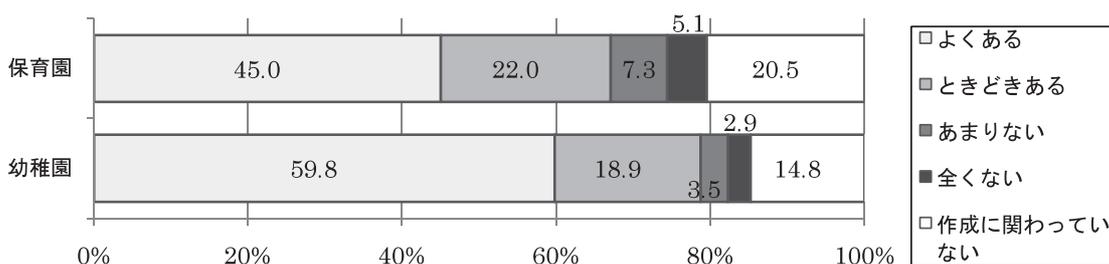


図11 日誌等書類の仕事の家への持ち帰り

応が増えたためだろうか。

日誌やクラスだよりなどの書類を作成する時間を見ると(図10)、勤務時間内に書類が作成できる保育者は35%前後であり、保育園では39.9%、幼稚園では49.9%の保育者が勤務時間内ではできないとしている。勤務時間に書類作成ができない場合は、家に持ち帰って仕事をすることになる。家に持ち帰って仕事をする保育者は、「よくある」「ときどきある」を合わせると、保育園では67%、幼稚園では78.7%であった(図11)。保育者は家へ帰っても仕事から離れられず、慢性的な忙しさを感じていた。しかし、保育業務は勤務時間外に行われていることから、勤務時間内の忙しさは、子どもへの対応に関係あると思われる。

次に、最近の子どもの様子について保育者がどのように感じているかをみる(図12)。「以前と比べ、保育をす

るのが大変・困難」であると感じている保育者は、81.6%であった。

では、保育者は、保育をする中でどのような困難さを感じているのだろうか。「園児のことばや行動にどう対応してよいか戸惑う」ことがあると回答した保育者は、「ある」「少しある」を合わせると78.9%であった。また、「園児の生活の様子や成長・発達について心配になる」と回答した保育者は85.6%であった。このことからうかがえることは、子どもへの対応に苦慮している保育者の姿である。よって、勤務時間内の保育者の忙しさは、対応が難しい子どもが増え、その対応に追われているためと思われる。

保育者を忙しいと感じさせる勤務時間内の要因はまだ他にもあるように思われる。保育者の帰宅時間をみると、保育園では「午後7時ごろ」との回答が38.3%で最

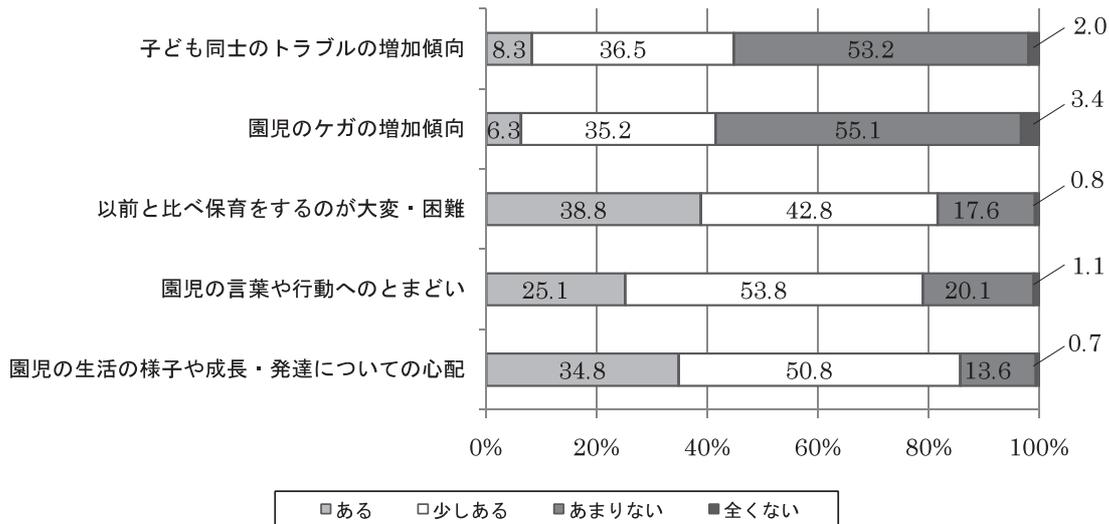


図12 最近の子どもの様子

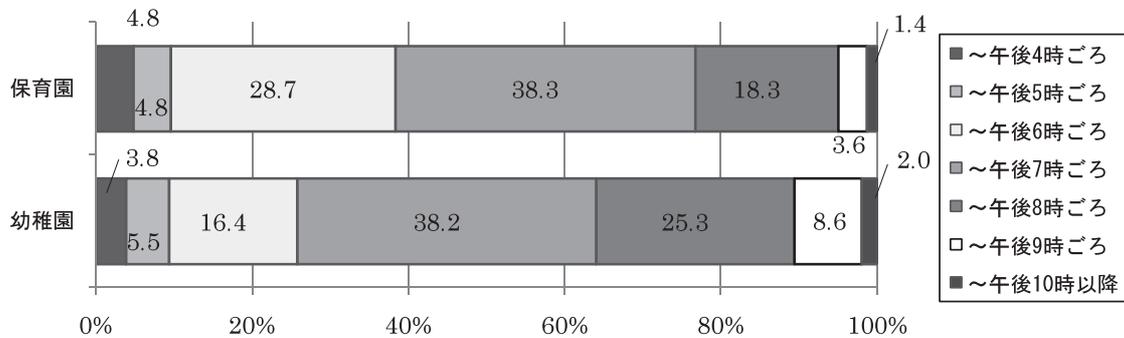


図13 保育者の帰宅時間

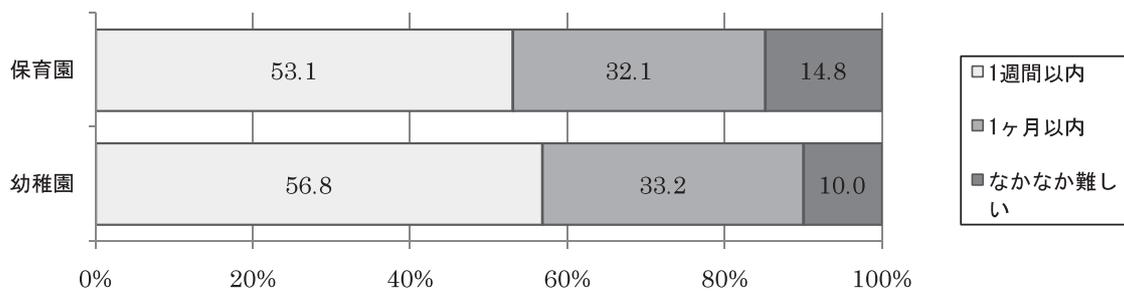


図14 担当クラスのほとんどの親と話をするのに要する時間

も多く、次いで「午後6時ごろ」が28.7%、「午後8時ごろ」が18.3%であった。幼稚園でも「午後7時ごろ」との回答が38.2%で最も多く、次いで「午後8時ごろ」が25.3%、「午後6時ごろ」が16.4%であった（図13）。

これらのことから、保育者は通常保育の後に、延長保育、職員会議、あるいは職員会議以外の保育者間での話し合い、行事の準備、明日の保育の準備などで帰宅時間が遅くなると思われる。しかしながら、今回の調査では、

他の可能性のある要因まではわからなかった。

②子育て相談のために必要な時間（図14）

では、子育て相談を行うためにどれだけの時間が必要だろうか。担当クラスのほとんどの親と話をするのに必要な時間を保育者に尋ねたところ、1週間以内で話をすることができるという回答した保育者は、保育園では53.1%、幼稚園では56.8%であった。ところが、3割以上の保育者は「2～3週間程度」あるいは「1カ月程度」

時間がかかる、「なかなか時間を取るのが難しい」と回答した。

なぜ時間を取るのが難しいか、「1ヶ月以内時間がかかる（「2～3週間程度」「1カ月程度」を合わせたもの）」「なかなか難しい」と回答した保育者に尋ねたところ、保育園と幼稚園とでは異なる理由で時間を確保するのが難しいことがうかがえる。

まず保育園の保育者は、勤務交替が74.3%（「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせた割合）、親の送迎時間が早朝だったり、夜遅かったりする（84.7%）ために、親と話をするのに時間がかかる、あるいはなかなか難しいと回答していた（図15）。

それに対して幼稚園の保育者は、通園バスの送迎に出かけていること（62.1%）と、クラスの人数が多い（55.9%）ために、親と話をするのに時間がかかる、あるいはなかなか難しいと回答していた（図15）。

園種によって多少異なるものの、親の送迎時間に保育者がいないことが親との話し合いを困難にする原因であると保育者は考えている。しかし、割合が低いものの「親の対応が苦手である」ためと回答している保育者が、保

育園では35.8%、幼稚園では27.8%いることから、保育士の資質に関わる要因も関連していると思われる。このことについては、後で検討する。

(2) 保育者と母親の子育て相談に対する意識

①子育て相談の現状

担当クラスのほとんどの親と話をするのに必要な時間は、1週間以内と回答した保育者に対して、実際に親から子育て相談や要望を受けたか質問を行ったところ、保育園の保育者では83.8%、幼稚園の保育者では88.3%であった（図16）。

その時の保育者の対応として、「できるだけ親の話を聞く」と回答した保育者は、保育園では84.4%、幼稚園では85.8%で最も多かった（図17）。

次に、「他の職員と一緒に話し合う」保育者は、保育園では65.8%、幼稚園では63.2%であった。「親を励ます」保育者は保育園では51.7%、幼稚園では54.4%であった。「自分で考えアドバイスする」保育者は、保育園では39.5%、幼稚園では45.4%であった。また、保育園、幼稚園でほとんど違いはみられなかった。

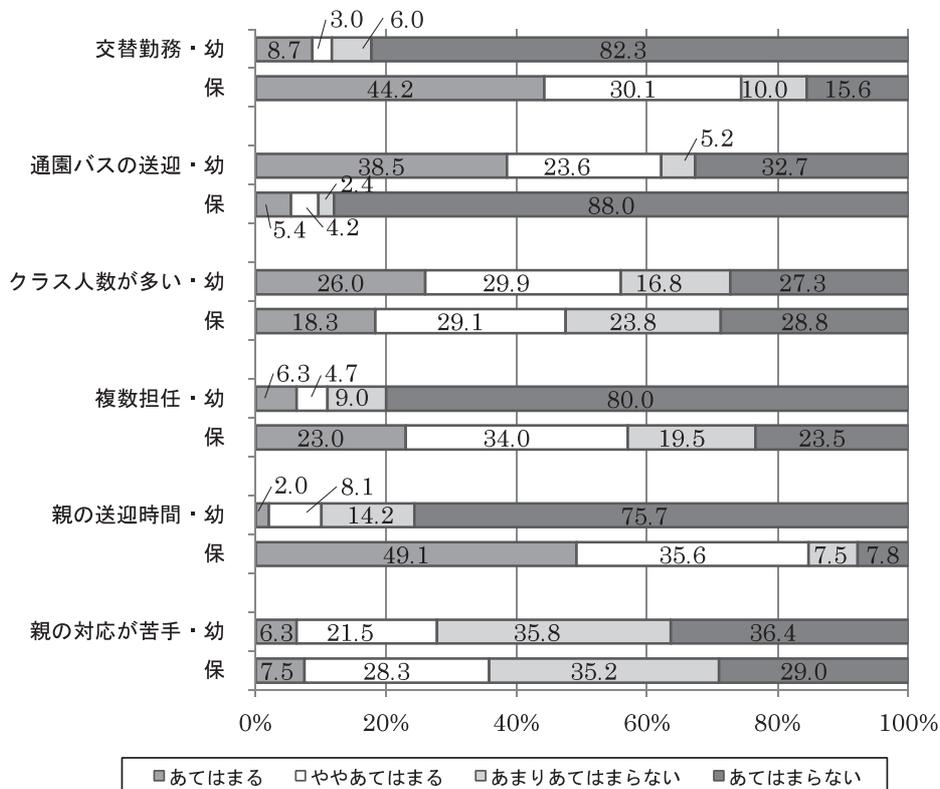


図15 親と話をするのが難しい理由

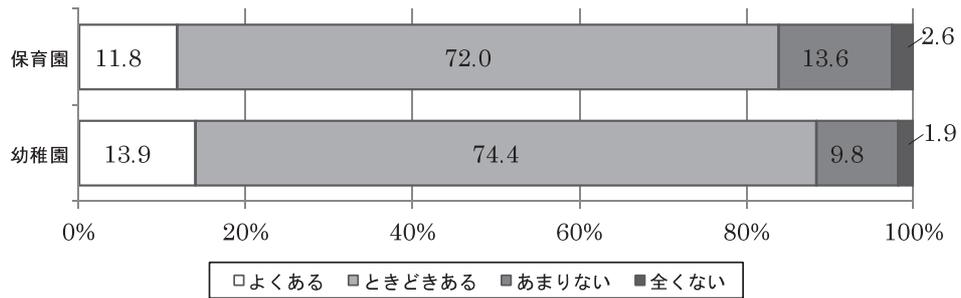


図16 親からの育児相談の有無

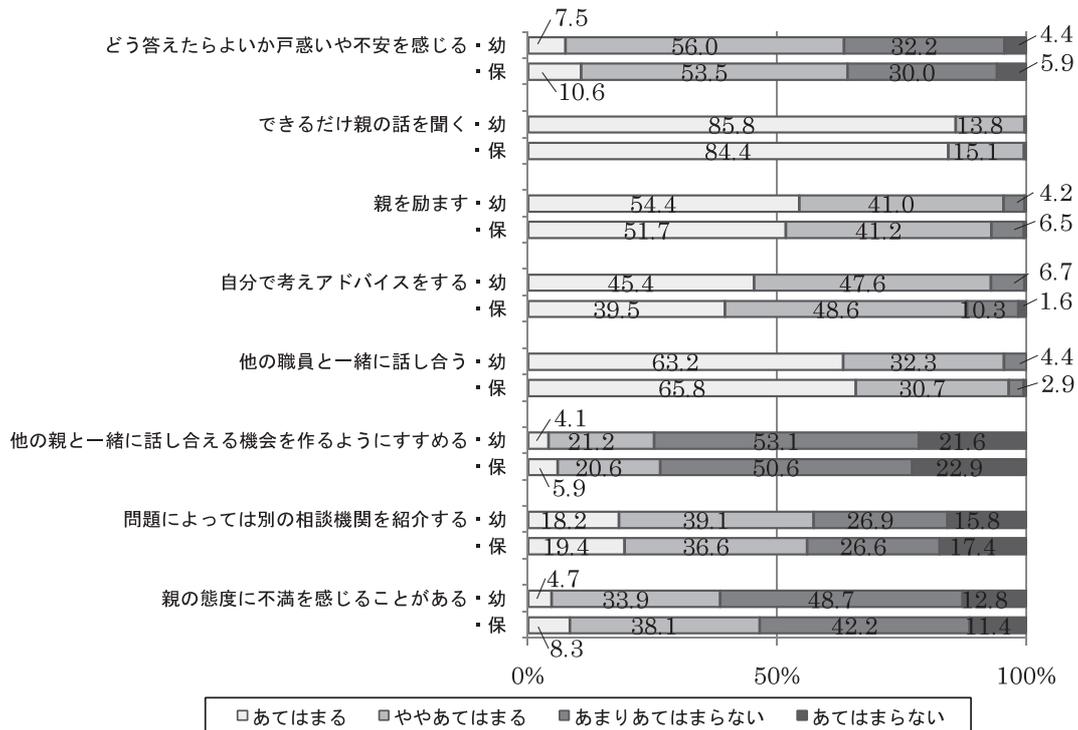


図17 親から相談を受けた時の対応 (0.9%以下の数値は表記していない)

気になることは、どう答えたらよいか戸惑いや不安を感じると回答した保育者が、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると、保育園では64.1%、幼稚園では63.5%いることである。このことは、子育て経験の不足からの不安や保育者の資質に関連している可能性が考えられる。しかし、今回の調査では現状はわからなかった。

これらのことから、保育者の相談時の対応は、できるだけ親の話を聞くようにしていることがわかった。また、相談の対応は他の職員と一緒に話し合って対応している保育者が6割以上であることがわかった。それに対して、保育者が自分で考えアドバイスをすることはやや低く、母親は相談した時に保育者からすぐアドバイスが

もらえない可能性があることも予想された。もしかしたら、このことが、アドバイスがほしいと思う母親のニーズと保育者の対応とのズレに繋がっているかもしれない。

③保育者の子育て相談に対する意識

普段から保育者が親とコミュニケーションを取ることは、保育者が親との信頼関係を築くためにも、親が保育者に相談しやすいと感じるためにも必要である。保育者が普段から親とのコミュニケーションが取れていると思っている割合（「とてもそう思う」「そう思う」を合わせたもの）は、保育園では69.4%、幼稚園では76.5%であった（図18）。

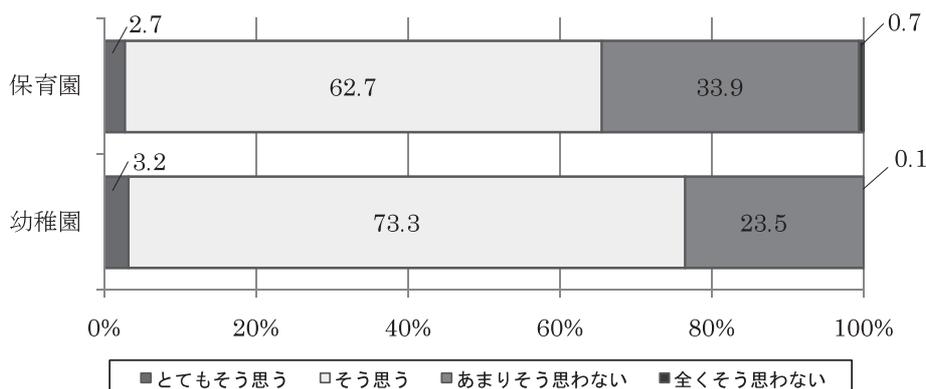


図18 普段の親とのコミュニケーションの有無

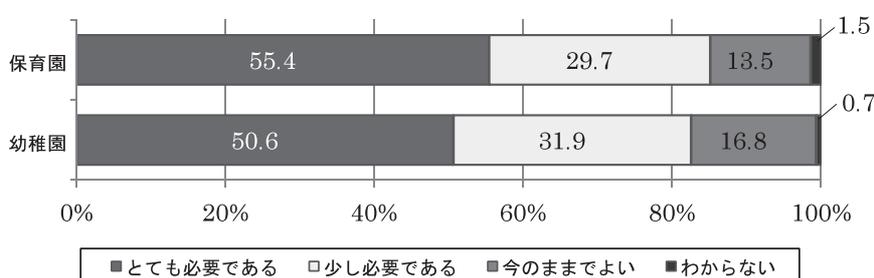


図19 親とゆっくり話し合える時間が必要か

普段から親とのコミュニケーションが取れている保育者が親との話し合いの機会についてどう考えているのだろうか。親とゆっくり話し合える時間が「とても必要である」と考えている保育者は、保育園では55.4%、幼稚園では50.6%であった。「少し必要である」という回答と合わせると、8割以上の保育者が親とゆっくり話す時間が必要であると考えている（図19）。

このことは、普段から親とのコミュニケーションは取れているが、親からの子育て相談にのる時間はないということを示している。つまり、普段のコミュニケーションの取り方は、挨拶や立ち話程度であると思われる。

また、担当クラスの母親からの育児相談の対応として、「育児について一緒に考える」という保育者は、「よくあると思う」「あると思う」を合わせると保育園では84.7%、幼稚園では83.2%であった。「育児の大変さを理解する」という保育者は、保育園では90.0%、幼稚園では90.2%であった。「育児について具体的にアドバイスをする」という保育者は、保育園では72.7%、幼稚園では65.1%であった（図20）。

この結果から、保育者による子育て相談の対応は、親の話を聞くことに重点が置かれており、「育児のアドバ

イスがほしい」という母親のニーズとズレがみられた。また、多くの保育者は母親とゆっくり話す時間が必要と考えていることから、母親と育児について話をし共感していくことが、母親のニーズであると保育者は考えていると思われる。

また、園への改善希望について（図21）、「親と保育者が落ち着いて話せる時間とスペース」を改善すべきと思っている保育者は、「大幅に改善すべき」「少し改善すべき」を合わせると保育園では52.6%、幼稚園では48.4%であり、母親の要望に比べ低い割合であった。それに対して、「今のままでよい」と思っている保育者は、保育園では32.5%、幼稚園では47.6%であった。幼稚園では親と話し合う機会は約半数が現状で満足していると思われていることがわかる。

また、「子どものことや悩み事などの相談への対応」について、「今のままでよい」と回答していた保育者は、保育園では50.0%、幼稚園では56.8%だった。このことから、保育者の約半数が、子育て相談に対する園の対応に満足していることが分かった。

以上から、親とゆっくり話す時間が必要と8割以上の保育者が思っているにもかかわらず、親との話し合いの

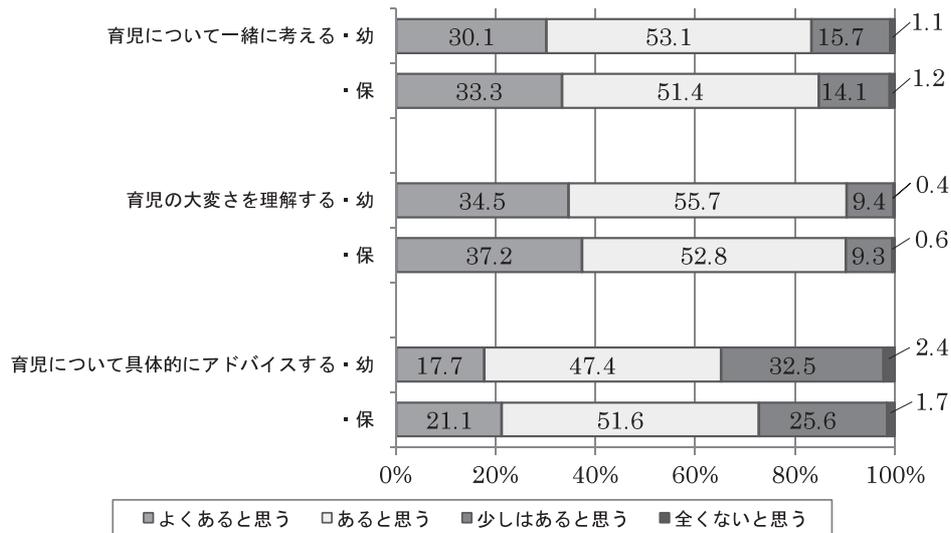


図20 担当クラスの母親に対してすること

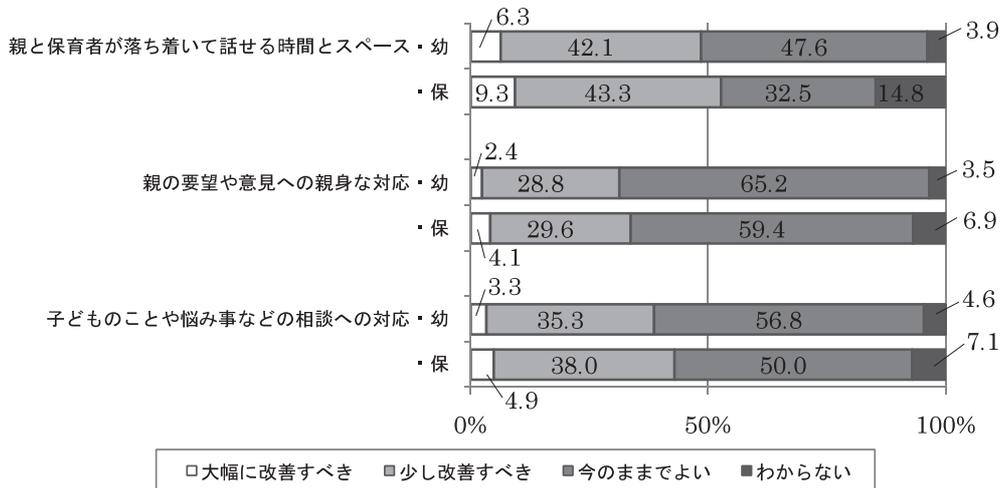


図21 園に対する改善の必要性

機会について園の対応を改善した方がいいと思っている保育者は5割程度に留まっていた。このことは、現状以上に親との話し合いの機会を確保できないと半数の保育者が考えていることを示している。

保育者は親と「育児について一緒に考える」、あるいは「育児の大変さを理解」したいと思っている。しかし、それは意識レベルで留まっているため、5年間母親の子育て相談に対する要望は高いままであったと思われる。

(3) 子育て相談を行うために必要な保育者の資質

子育て相談に対する母親の要望で最も高かった項目は、保育者からの育児のアドバイスであった。このことは5年間変化がなかった。その理由として、保育者によ

る子育て相談の対応が親の話聞くことや育児の大変さを理解することに重点が置かれており、育児のアドバイスに重点が置かれていなかったことが関連していると思われる。ここでは、2008年調査から、育児のアドバイスに関連があると思われる子育て相談における保育者の質に焦点を当て、母親のニーズとのズレを検討する。

① 子育て世代の保育者

厚生労働省が実施した平成22年度「出生に関する統計(2008年12月9日実施)」²⁾によると、母親の出生時平均年齢(第1子)は、29.7歳と報告されている。この報告を参考にし保育者の年代構成をみると(図22)、子育て世代である30代の保育者は、保育園では24.4%、幼稚園では18.7%であった。子育て世代の保育者は、同

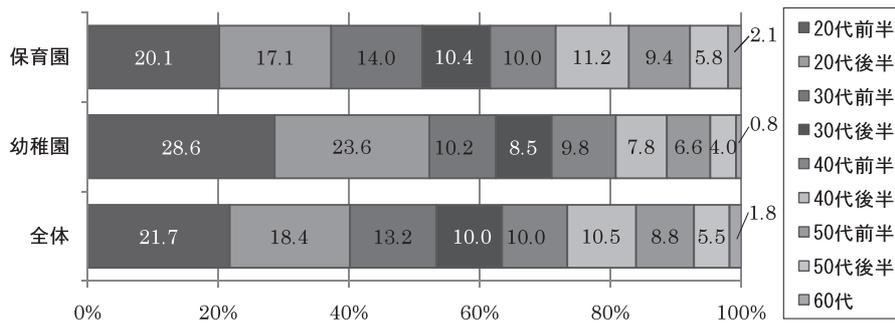


図22 保育者の年代構成比率 (%)

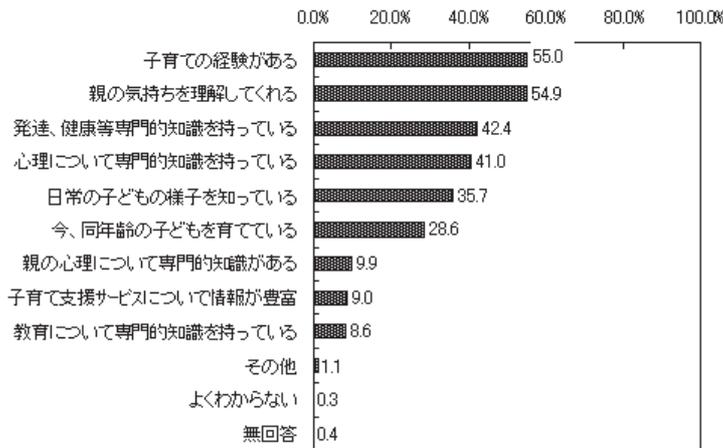


図23 相談相手としての条件：母親
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1b.html>)

じ子育てをしている親として共感し合える部分があると思われる。また、40代の保育者の割合は保育園では24.4%、幼稚園では18.7%であり、30代保育者と同様に同じ子育て世代として、あるいは子育ての先輩として、具体的なアドバイスが望めるとと思われる。

しかしながら、保育に従事する保育者の多くは20代であり、保育園では37.1%、幼稚園では52.2%を占めていた。特に20代前半の保育者は、保育園では20.1%、幼稚園では28.6%と年代構成比率が最も高く、その傾向は幼稚園において顕著であった。

2003年に未就学児をもつ2000世帯の父母（父親2000名、母親2000名）を対象に厚生労働省が行った「子育て支援策等に関する調査研究」³⁾によると（図23）、子育ての相談相手の条件は、「子育ての経験があること」、「親の気持ちを理解してくれること」がそれぞれ約55%、「発達、健康等専門知識を持っていること」が42.4%、「心理について専門的知識を持っていること」が41.0%であっ

た。

このことから、母親は子育ての相談相手に求める条件として、専門的な知識が必要としながらも、それ以上に「子育ての経験があること」、「親の気持ちを理解してくれること」を重視していることがわかる。

また、2008年のベネッセ教育研究開発センターによる幼稚園児、保育園児をもつ保護者を対象とした「第3回子育て生活基本調査（幼児版）」⁴⁾によると（図24）、「特に信頼するしつけや教育の情報源」として、「園の先生」は、専業主婦では28.0%、パートやフリーでは31.2%、フルタイムでは37.5%であった。このことから、信頼できる子育てやしつけの情報源として、母親のおよそ3割は園の先生を挙げており、特に就労形態がフルタイムの母親は、他の就労形態の母親よりも園の先生を信頼できる情報源としていることがわかった。

これら2つの調査を合わせると、母親は子育て経験を活かして具体的な子育てのアドバイスをしてくれる保育

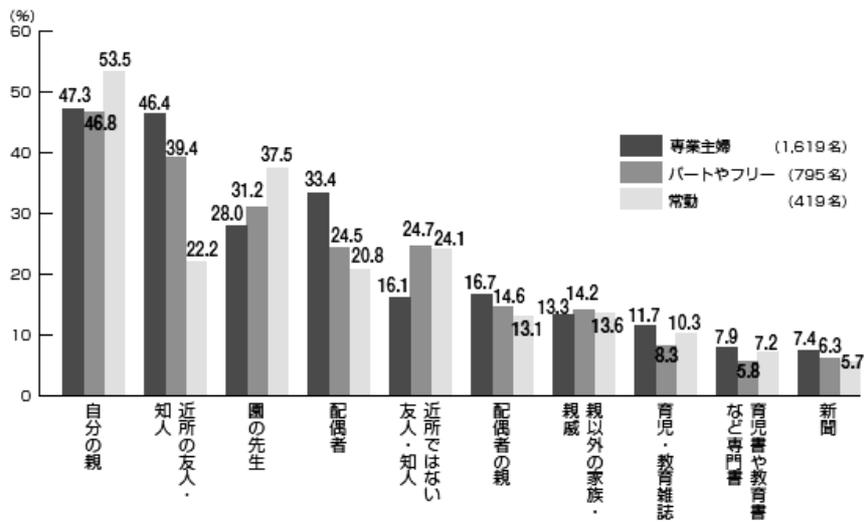


図24 とくに信頼するしつけや教育の情報源（母親の就業状況別）
 注）複数回答。「その他」を含む21項目のうち、10項目を図示した。
 (http://benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/hon1_2_6.html)

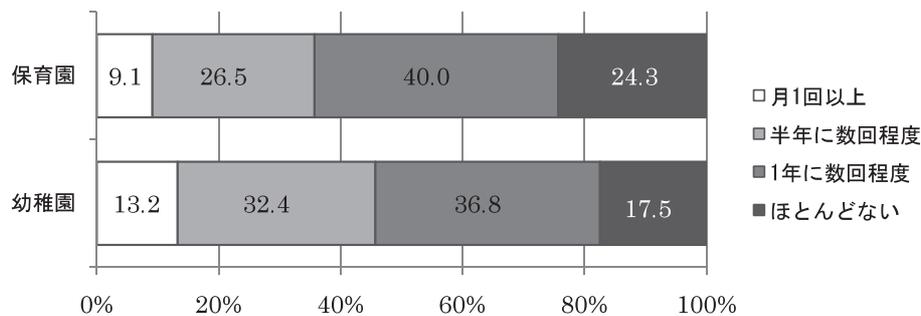


図25 園外の研究会・研修会等の参加

者を信頼できる情報源であると考えていることが示された。しかし、子育ての経験のない保育者の割合が多いことは、母親の子育て相談のニーズに応えきれない可能性が考えられる。

②子育て相談を行うために必要な保育者の資質

母親は子育ての相談相手に求める条件の1つに「子育て経験があること」を挙げていることがわかった。しかしながら、園の年代構成の現状をみると、20代の保育者の割合が多く、子育て経験がなくても母親の子育ての悩みに応えていく必要がある。また、子育て経験がある保育者でも、専門的知識が乏しいと相談に応えられない場合があると思われる。

母親のニーズは子育ての大変さを共感してもらうだけでなく、子育てのアドバイスを望んでいることから、保育者には子育て経験の乏しさを補う保育の専門的知見に基づく具体的なアドバイスが求められる。そのために

は、保育者の専門性の向上に繋がる研修が必要不可欠であると思われる。

園外の研究会・研修会への参加状況を見ると（図25）、月1回以上研修会、研究会を行っている保育者は1割前後である。月1回程度の割合を合わせても、保育園では35.6%、幼稚園では45.6%と半数にも満たなかった。また、ほとんど研修会などの機会はないという保育者も2割前後を占めていた。

この状況について、学習の機会の提供に対する保育者の園への改善希望は（図26）、「大幅に改善すべき」「少し改善すべき」を合わせると、保育園では36.2%、幼稚園では33.1%であった。このことから、約6割の保育者は園外での学習の機会について現状のままではよいと思っていることがわかる。

しかし、親から相談を受けた時の対応について、どう答えたらよいか戸惑いや不安を感じている保育者が

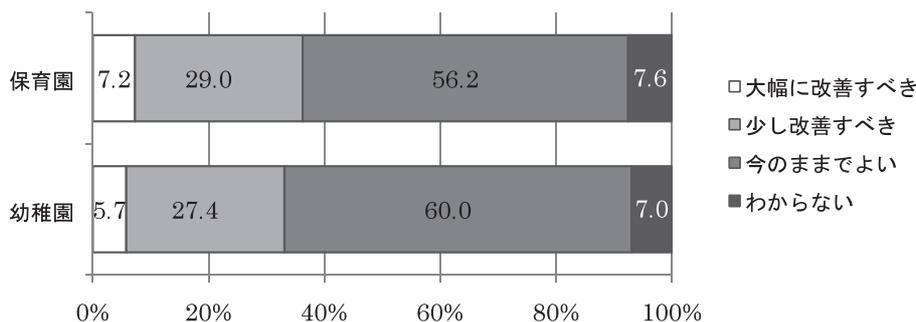


図26 園に対する保育に関する研究や学習の機会の提供の改善希望

60%を超える背景には、保育者が子育て相談について学習する機会が少ない可能性が考えられる。

以上のことから、保育者は保育実践の質の向上だけでなく、子育て相談に必要な知識や技術を身につけることも求められている。保育者が子育て相談の対応の質を向上させることによって、子育て相談に対する母親の要望も改善されると思われる。

IV. 考 察

保育者による子育て相談について、なぜ母親の子育て相談に対する要望が高いままだったのか、4つの視点から検討を行った。

まず、母親と保育者がゆっくり話す機会を確保できないことが浮かび上がってきた。母親と保育者が話をする機会が確保できない要因の1つに、親の送迎時間に保育者がいないことが浮かび上がってきた。その理由として、通園バスの送迎や交替勤務のために親の送迎時間に保育者がいない、あるいは親の送迎時間が早朝だったり、夜遅かったりするために時間が合わないという実態が明らかになってきた。

しかしながら、このことは交替勤務や通園バスの送迎のシフトを親に合わせて変更するなどによって解決できると思われる。

では、保育者が日常的に忙しいため親の送迎時間に親との時間が確保しにくいのではないかという視点からみると、勤務時間内の忙しさは対応に困る子どもが増えていくことが要因であり、親の送迎時間に直接影響はなかった。日誌等の書類作成も保育者が忙しいと感じる要因になるが、こちらは勤務時間内ではなく、家に持ち帰

っているため、慢性的な忙しさを感じる要因になると思われるが、親との時間の確保を困難にする直接的な要因ではないと思われる。

それ以外の要因（保育の準備、職員会議、保育以外の事務など）については今回の調査ではわからなかった。

次に、子育て相談のニーズという視点からみると、母親は保育者の子育て経験に基づくアドバイスを最も強く求めているが、それに応えられるような子育て経験のある保育者は少ないというズレがあることがわかった。

20代の保育者が子育て世代となる30代以降になると減る要因の1つに、保育者の勤務内容、体制が関係しているようである。2008年調査の保育者による自由記述の中で、「私立の場合、結婚、出産を機に辞める場合が多い。勤務時間の問題や、1人担任の場合持ちかえる仕事が多い、また有休も取りにくい」など、保育者自身が働きながら仕事を続けられる環境にいないことが述べられている。また、私立幼稚園では結婚、出産を機に辞めなければならないケースもあり、20代の若い保育者の割合が多い一因になっているようである。このように保育者の年齢という要因が関連していると思われる。

また、保育者の年齢の要因以外に、保育者の子育て相談の対応と親のニーズとにズレがあることがわかった。保育者の子育て相談の対応は、親の話を聞くことに重点が置かれており、「育児のアドバイスがほしい」という母親のニーズとズレがみられた。多くの保育者は母親とゆっくり話す時間が必要と考えていることから、保育者は母親と育児について話をし、共感していくことが母親のニーズであると考えていると思われる。

また、親の相談にどう対応したらよいか戸惑ったり不安を感じたりするという保育者が6割程度おり、子育て

相談の対応に自信がない保育者の存在が浮かび上がってきた。

これらは、おそらく子育て相談について学習する機会があまりなかったためと思われる。保育者は、親から相談を受けると、他の保育者と話し合っただけで対応することも多いが（図 23, 24 参照）、それぞれの相談は個別のケースとして処理されている可能性があり、次の相談に活かされていないと考えられる。親からの相談にどう対応するか、知識として体系的にまとめられると、保育者の子育て相談のスキルも向上し、親のニーズに応えられるかもしれない。

では、研修会や研究会などの学習の機会は確保されているだろうか。研修会などの学習の機会について、保育者の約 4 割は年に数回しか園外の研究会等に参加していなかった。さらに、学習の機会は現状のままでいいと約 6 割の保育者が思っていた。その理由は今回の調査では調査していない。

以上のことから、親の保育者との話し合いの機会に対する要望が依然として高いのは、子育て世代の保育者が少ないこと、研修会、研究会などの学習の機会も少なく、親のニーズに関連する要因が改善されなかったためであると思われる。そして、その背景に保育者の「忙しさ」に対する意識があるように思われる。

2008 年調査の自由記述の 1 部を紹介すると、「予算も人員も増やさず、必要とされる仕事量だけ増える現状では心身ともに疲れ切ってしまう、ゆとりをもって保護者、子どもに接することができず感じます」と、切羽詰まった保育者の実態が綴られている。また、保育者の質の向上が求められていることには賛成であるが、「今の保育園は忙しすぎて（子育て事業や行事等）確保できない」とあり、「忙しいから、〇〇できない」という保育者の意識がみえてきた。

「忙しさ」は何が原因かについて再び自由記述をみると、いくつかの異なるケースによって保育者は「忙しさ」を感じているようである。

例えば、保育者の雇用形態の違いからくるケースである。人件費を削減するために臨時職員が増え、安い賃金で同じ仕事をしなければいけない臨時職員や、臨時職員が増えたために正規職員の保育業務や負担が増えたというケースがあり、保育者は「忙しさ」を感じるようだった。

た。

また、具体的にはわからなかったが、保育業務が年々増えており、「忙しさ」を感じるというケースもあった。

まだ他に自由記述には書かれていたが、保育者は様々なケースを全て「忙しさ」でまとめてしまっている。そして、「忙しいから、ゆとりをもって保育ができない」「忙しいから、研修会へ行く時間がない」となる。

しかし、その「忙しさ」をひとまとめにしまうと、解決の糸口がみえにくくなる。例えば、書類が増えて忙しいこと、ゆとりをもって保育ができないことは、具体的にどうつながるのか、本来はそれぞれの原因を解明して解決しなければならないが、「忙しさ」でくくられてしまっている。

「忙しさ」の要因には保育者個人の問題、園の運営に関わる問題、行政レベルの問題などがある。その要因を分けて考え、改善できるところは改善し、行政に訴えなければならないところは訴えていく必要があると思われる。

例えば、行事についていえば、例年通りだからやるのではなく、園全体で話し合いをし、本当に必要なものか点検してみることも必要ではないだろうか。また、作業を分担して作業時間が短縮できるのであれば、園全体で協力する体制をつくる必要があるかもしれない。

調査結果から、5 年間で子育て相談に関する母親の要望は依然として高いままだった。その要因を 4 つの視点で検討してきたが、その背景には保育者の「忙しさ」に対する意識があった。どこから「忙しさ」がきているのかを園全体で点検し、原因を探ることが必要と思われる。

そうすることによって、「忙しさ」が、親と話す機会の確保やニーズのズレの問題、学習の機会などとは別の問題であると認識され、子育て相談の改善が進むと思われる。

V. 今後の課題

母親の子育て相談に対する要望が依然として高いままだったのは、子育て相談の機会がなかったからだけではなく、子育て経験のない保育者が多いことや、保育者の子育て相談のスキルを身につける機会が少ないという問題が浮かび上がってきた。

また、保育者の感じる「忙しさ」が、子育て相談の要望改善を阻む一因である可能性も浮かび上がってきた。

今後の課題として、子育て相談の改善を阻む「忙しさ」の具体的な要因を探る必要がある。その要因が改善されることで、子育て相談の対応も改善されるだろう。

付 記

本研究は科学研究費「男女共同参画社会を支える地域子育てネットワークに関する学際的基盤」(2002～2005年度 基盤研究(B) 村山祐一代表 課題番号 14310123)、「格差社会における子育て支援ネットワークのあり方と保育者の役割に関する総合的研究」(2007～2010年度 基盤研究(B) 村山祐一代表 課題番号 19330179) による調査データを使用した。

注

- 1) 「発達」通巻第114号(2008年4月発行, ミネルヴァ書房) 特集「『父親・母親・保育者三万人の声』から見えてきた子育てと保育」
- 2) 厚生労働省「平成22年度 出生に関する統計」2008年, <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jikou/tokusyu/syussyuo06/index.html>> (2013年1月10日)
- 3) 厚生労働省「子育て支援策等に関する調査研究」2003年, <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1b.html>> (2012年11月29日)。
- 4) ベネッセ教育研究開発センター「第3回子育て生活基本調査(幼児版)」2008年, <http://benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/pdf/data_05.pdf> (2012年11月29日) pp. 43。